

原爆文学研究会報

第二四号

原爆文学研究会 二〇〇八年八月

腹立たしかった心 聴講者の平均年齢がぐっと高い市民講座で、先日、原爆文学について話す機会を得ました。厠に立ったところで被爆した原民喜から始め、家族が参列のために出払う平和祈念式典の時間帯を狙って情事を画策する若妻を描いた青来有一の小説に至るまで、勢いあまつたつぷり二時間。講師聴講者双方すっかり疲労困憊。それでも、続く質疑応答では会場で最年少と思しき女性(大学を卒業したばかりだとか)が最初に手を挙げました。彼女はまず「今から言うことは、ここにお集まりの皆さんにはとても不愉快かもしれません。あらかじめ、すみません、とお断りします。」と前置きし、聴講の感想として、次のようなことを語り始めました。

小学生の頃に原爆の語り部さんの話を初めて聴いて、まず何よりも「怖い」という気持ちがわきあがった。次に、「どうしてこんな怖い話を聞かなくちゃならないのか」と不本意だった。……

講座の中で、沖縄戦の語り部の話に違和感を覚えたという感想を率直に述べて物議をかもした大学生の話を紹介しました(この論争の経緯は加藤典洋『言語表現法講義』(岩波書店)の中の「第六回 言葉はどこで考えることと出会うか」で確認できます)。たぶんその話題に背中を押されて彼女は「すみません」の壁をよじ登り、年配の人々の前で打ち明けたくなったのでしょう。続けて彼女曰く、「そして、『私たちが起こした戦争ではないのに、なぜ私たちに背負わせようとするのか』と最後には腹立たしくなりました」。

酷暑の中を、汗を拭き拭き彼女はここへやって来たんだなあ、と、緊張気味にマイクを握る姿を見ながら私は考えていました。腹立た

しく思ったのはもう十年以上も前のことだろうに、それでも今日は原爆に関わる(しかも長時間の)話を聴きに、彼女はここへ来たんだなあ。
語り部がこれまで語り続けてきたことの、今ここでの、そしてこれからの意味を、とつとつと話す彼女を見ながら私は考えていました。
(内田友子)

第二四回 原爆文学研究会報告

二〇〇八年六月七日(土)活水女子大学東山手キャンパスで開催した第二四回原爆文学研究会には約二五名が参加。

坂口氏の発表については「都市空爆史の文脈の中で原爆投下を見直すこと」によって何が見えてくるのか」「栗原貞子は、個人・市民と国家との関係をどのようにとらえているのか」等の質疑がありました。

野坂氏の発表については「林京子の〈わかりやすさ〉がわかりにくくしているものとは何か」「(第三次原爆論争)の問題の立て方では、核をめぐる同時代的な問題がかえって見えなくなっているのではないか」等の質疑がありました。



◇ 研究発表1

ヒロシマから重慶へ

——「二国平和主義」を超えるために 坂口博

二〇〇四年六月二日、原文研の世話人も務めた花田俊典が急逝した。その一か月後、七月三日に第一回の研究会が開かれた。この時、「B29の記憶——戦争は美しいか」という報告をした。これが、第一回から参加しながらも、私の初めての発表だった。「会報」第一号に「今回の報告発表は、当初の予定からするなら、その十分の一辺り」と書いている。四年後の二回目、果たしてどの辺りまで進むことができただろうか。

ただ、今回でこの課題の見通しは、ほぼつけることができた。おそらく、同じテーマでの発表はない。報告でも「結論」を先に出し、「感情に訴える言説」を排し、公正な論議の場をまず形成した上で、「原爆文学」の役割を、個人の体験・物語でもって、じつさいの「政治・戦争」過程に対峙し、逆転していく可能性を秘めたものと位置づけた。

私が受けた戦後民主主義の歴史教育でも、中国との戦争の経緯は、ほとんど教えられなかった。九州北部はビルマ・雲南戦線における大量の戦死者を出した土地で、あちこちに慰霊のパコダを見るにもかかわらず、米英との「太平洋戦争」史観は、恐ろしいまでに蔓延している。この史観の克服は、長い課題であった。「重慶爆撃」を世界大戦史に刻むことによって、ようやく中国との戦争にこそ敗北し

た事実を認識できる。火野葦平や丸山豊の文学作品を読み解くことが可能となった。

もちろん、一九四五年八月の米軍、それもB29重爆撃機による原爆投下と、その爆発なしに、「原爆文学」は成立しえない。そうした厳然たる「歴史的事実」を動かしようはないにしても、様々なかたちで「相対化」する試みは許されるし、また特権化による言説・思想の頹廃・腐敗を防ぐためにも必要である。そうした意図で始めた日本本土への都市空襲に対する関心の延長線は、そこに旧植民地・占領地への空襲、また日本軍の都市空襲（戦略爆撃）を見出すこととなった。

今回の発表では、前田哲男『戦略爆撃の思想——ゲルニカ・重慶・広島への軌跡——』（朝日新聞社、88・8 ↓新訂版 凱風社、06・8）に全面的に依拠した。「ヒロシマから重慶へ」は、「重慶から広島へ」の戦略爆撃思想の「進化」を逆転させ、民衆・市民の側に思想的な主導権を取り戻したいがためである。東京地裁では、国家への損害賠償を求めた東京大空襲訴訟とともに、重慶大爆撃訴訟も進んでいる。この歩みがどこへ向かうか、予断は許されないが、日本（この場合、現実に沖縄は除かれている）だけの「平和」を希求する、国家公認の「平和主義」（「平和」というイデオロギー装置、信仰）を超えて、より具体的・現実的な平和を実現するには、私たちは何をなすべきか？ 原爆文学が一人ひとりの物語を立ち上げることによって共感を呼ぶように、私も、「二国平和主義」に拮抗しえる、新たな物語（論考）を生み出していくように努力したい。

林京子と第三次原爆文学論争

野坂 昭雄

第三次文学論争は、七〇年代末から八〇年代初めにかけて行われた、林京子の作品をめぐる中上健次らの批判を指して、『グラウンド・ゼロを書く』でジョン・トリートが名付けたものである。トリートはその背後に八二年の「核戦争の危機を訴える文学者の声明」があることも指摘し、「声明」をめぐる議論を『グラウンド・ゼロを書く』で詳細に辿っているが、本発表では中上と林の間にある文学観の違いを考察の出発点とした。

林京子の作品は、中上らの批判にあるとおり、「原爆を書けば文学になる」と考えているような点も見られる。事実、一九七五年に芥川賞を受賞した「祭りの場」は、文学としてよりは寧ろ原爆をテーマとしている点が選評では評価されている。これは、文学のテーマとしての「原爆」がある種の商業主義に組み込まれていくプロセスと見ることも可能だ。原爆文学のカノンである『黒い雨』と『夏の花』が、この頃に高校の国語教科書に採録され始めていることも、その流れの中の出来事であろう。逆に第三次原爆文学論争は、「文学」として原爆を描くとはどういうことか、という問いを再提示すると同時に、戦後の日本社会の中で「原爆」がどう政治や文学の中で機能してきたかを問い直す契機となる。

林の作品には、感情をコントロールするような面が見られる。作品内の「私」が原爆に対するルサンチマンを吐露し、社会への怒りをぶつけなければつづけるほど、読者はそこに自らの代弁者を見出す。

中上が批判したのはそうした点であった。つまり、戦争で加害者であった〈大人〉にとつて、林の作品は自らの被害者性を代弁してくれ、また自らを正当化してくれるものだったのである。ここに一種の感情のコントロールがあると見てよい。

ところで、林は原爆を描く一方、幼少期に過ごした上海での生活をいろいろと作品化しているが、その中で上海の中国人や売春婦である日本女性といった弱者を描き、また「長い時間をかけた人間の経験」では被爆後に自らの体を売って生活していた「女」を登場させている。(ちなみに、この老女については二〇〇二年七月九日付『朝日新聞』の記事「在る。——林京子③」で触れられています。記事の存在を教えてくださいました内田友子さんに感謝申し上げます。)確かに上海体験も、「長い時間……」での老女も、林がそれまで絶対化していた自らの体験を、相対化する役割を果たしている。だが、「長い時間……」の「私」は、原爆へのルサンチマンを芸術家との対話の中に組み込み、内面の葛藤として描き出す。こうした処理は、林の作品が多くの読者を獲得するために必要なものであろうが、例えば「半放浪」で大田洋子が発した「ざまを見ろ」という言葉の直接性からは隔たりがある。

原爆文学が「文学」として存在するためには、ルサンチマンを作品内に組み込むことが必要だった。言い換えれば、それは原爆をめぐるさまざまな情動を、消費社会の中に組み入れることである。一方で、「長い時間……」や「トリニティからトリニティへ」では、林は「祭りの場」から出発した円環の完成を目指しており、しかもある程度の小説的な完成度を示しているのである。さらに「長い時間」の末尾では、「私」は全てを包摂する自然へと思いを馳せるのだが、こうした林の小説的営為をどう評価するべきか。今回の発表ではそこまで考察できなかつた。

彙報

第二四回 原爆文学研究会

○日時 二〇〇八年六月七日(土) 一四時より

○会場 活水女子大学東山手キャンパス四号館二階会議室

○研究発表

ヒロシマから重慶へ——「二国平和主義」を超えるために——

坂口 博

林京子と第三次原爆文学論争

野坂 昭雄

機関誌 「原爆文学研究」 第七号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイ等も掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書 式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇八年一〇月中旬、データファイル (Word か 太郎) を添付しての投稿の場合は同年一〇月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一 一九三 佐世保市沖新町一—一
佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

編集後記

前回の研究会の翌日(六月八日)、活水女子大学の服部康喜氏の案内で長崎大学医学部(旧・長崎医科大学)周辺の被爆遺構や慰霊碑を十数人で見て回りました。傾いた門柱や慰霊碑はかつて見たことがあったので、「再訪」するつもりで参加したのですが、存在すら全く知らなかった碑が、「グビロガ丘」の一角にひっそりと立っていました。それは、当時台湾から医学専門部に留学していた



郭芳徽という人の慰霊碑です。齋藤寛『大学の窓から—医学部百五十周年に思う』(二〇〇七年一月、長崎文献社)によれば、十年ほど前、実弟にあたる方から問い合わせがあったのをきっかけに、葬られた場所を調査し、碑を建立したのだそうです。案内されて碑の存在を知り、碑を通じてその人の存在を知ることができた、という思いと、記憶のよすがもなく、思いを巡らす術すべもない死者も多くいるのだという思いが交錯しました。(中野和典)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四—二—一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>